**報告および質疑応答の概要**

**司　会：水溜真由美（北海道大学）**

**報告者：庄司武史（東京都立大学）**

**報告名：「財団法人二十世紀研究所の事業と思想」**

この報告では，終戦直後，戦後社会とデモクラシーの再興を目指して設立された知識人集団「財団法人二十世紀研究所」のこれまで知られてこなかった事業と思想を，近年，新たに捜出されてきた史資料の読解から明らかにした。社会学者・清水幾太郎，経済学者・大河内一男，英文学者・細入藤太郎を中心に1946年2月に設立された二十世紀研究所は，学術研究のみならず，敗戦によって既存の権威や知識が揺らぐなか，拠りどころを失った全国の人びとのもとに足を運んで積極的な啓発事業を展開した。ただ，主な活動が1946年から1948年末までのごく短い期間に限られたためもあってか，同研究所をめぐる関係者の述懐は少数かつ泡沫的なものにとどまり，研究もほとんど蓄積がなく，その実態は未解明であった。近年，報告者が史資料の検索に注力した結果，国立公文書館所蔵の特定歴史公文書等をはじめ，研究所が当時，発行した書籍・紀要・パンフレット等も新たに捜出されてきた。とりわけ国立公文書館所蔵の資料は研究所の設立・解散等に係る重要文書で，これにより，従来，依拠してきた清水や一部の関係者の述懐にはない研究所の構想が明らかになるなど，研究環境は着実に充実しつつある。こうした事前研究も踏まえ，今回は研究所の基本的性格や当初の構想，事業やメンバー等に焦点を当てて報告した。

質疑応答では，「二十世紀研究所」という名称に込められた問題意識や含意について詳しく説明してほしい，アメリカの「二十世紀財団」のどのような点に示唆を受けたのか，また講座派的な枠組みの下で日本社会の近代化を目指すパラダイムの動向を踏まえた場合に「二十世紀研究所」が「二十世紀」と冠したことの意味をどのように評価できるかといった質疑が挙げられた。

これに対し報告者は，たとえば当時の清水幾太郎においてマルクス主義の影響は無視できないものの，むしろ元号や皇紀に象徴される日本独自の文化に過度に固執せず，東西両文明の批判的乗り越えを目指す戦前期の議論や活動を通して西暦や世紀に象徴される連続的な時間軸を強く印象づけられていた可能性を指摘した。この点の論証は今後の課題だが，戦後，研究所の名称を考えた清水がすぐ「二十世紀」を想起できたのは，細入藤太郎が語る二十世紀財団の活動の示唆とともにこうした戦前における活動の経験もあったように思われ，それにより二十世紀研究所の活動の対象領域を二十世紀全体，そして来るべき次の世紀へと継続していくことを想定していた可能性を指摘し（細入もゆくゆくは「二十一世紀研究所」への発展を期待していたと回顧したことがある），終戦直後の知識人の戦前や敗戦への向き合い方の一例として特筆に値するように思われることを付言した。

二十世紀財団からの示唆については，清水や細入の回顧を参照する限り，研究者・科学者への助成事業への畏敬が念頭にあったようだが，同財団が“Twentieth Century”を冠していた理由も併せて検討することができれば興味深い示唆が得られる可能性もあり，また，報告者としても同財団の活動の歴史の整理による十分な論証は必要と考えているので，この点については今後に期したい旨を付言し応答とした。